

# 良食米の栽培を呼びかけ ～良質米生産振興研修会～

良質米生産の栽培技術向上や経営改善に向けた情報共有に向け「良質米生産振興研修会」（主催：神奈川県、JA県中央会、JA全農かながわ、神奈川県農業共済組合）が、3月18日に県農業技術センターで開催され、生産者やJA・関係機関職員など約150人が参加した。

主食用米の需要が全国的に減少しているため、政府は交付金等を活用した飼料用米の増産を呼びかけている。一方、神奈川県では平成23年産より、地産地消や学童等への農業理解促進に向け「学校給食用米確保運動」に取り組んでおり、平成27年産は運動開始後初の2,000トンを超えとなる2,220tが確保できる見通しとなった。県中央会は主催者挨拶の中で「今後も県学校給食会の必要数量の全量県産米確保を目指し、生産者の皆様のご理解ご協力をお願いしたい」と挨拶した。

研修では、県農業技術センター普及指導部作物加工課の稲毛正彦氏が、27年から県の水稻奨励品種になった「はるみ」の栽培技術の基本や品質向上対策について、同じく奨励品種の「キヌヒカリ」と比較しながら説明した。「はるみ」は良食味で収量も見込める品種だが、県内生産者へのアンケート結果から、「収量が増えない」「倒伏したり、収穫期判断が難しいなど」育てにくいと感じる人がいる事が判明した。平成27年産「はるみ」の1等米比率も期待値を下回ったため、「はるみ」の栽培特性や留意点について再確認した。稲毛氏は「水稻『はるみ』は神奈川の風土に合った品種で、栽培量も他県では増えていない。神奈川県産まれの銘柄を一緒に大きく育てましょう」と呼びかけた。

試験圃場を使い、良質米栽培モデルの研究に取り組むJAあつぎ営農指導課、JAかながわ西湘指導課、JA湘南営農販売課の3JAが、移植時期や追肥条件などを変えた場合の生育状況や収量、食味などについて、標準栽培との比較結果を報告した。28年度も引き続き調査する予定。

また、農研機構・生産システム研究部・主任研究員の吉田隆延氏が、有機水稻栽培で課題となる除草作業を軽減するために開発した「高精度水田用除草機」について、無農薬有機水稻栽培に取り組む産地での活用例を紹介した。



県の水稻奨励品種に決定した「はるみ」の特徴や栽培方法を再確認した